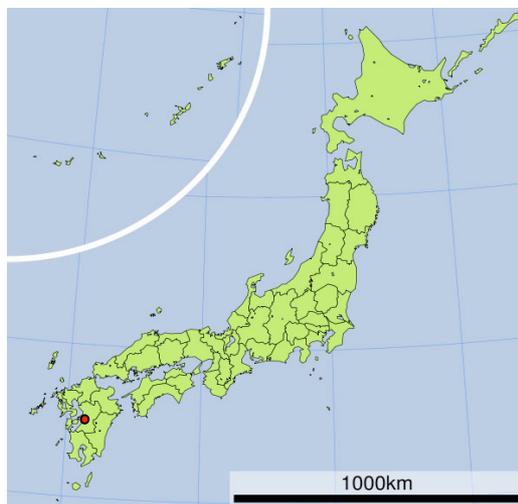


## 白川（熊本県）

伊藤敬子

### 1. 白川とは

熊本県には白川という大きな川がある。白川は熊本の代表的な山である阿蘇山（活火山）の麓から流れ、熊本市内を貫通し、有明海に流れる。支流はなく、山を水の入り口とし、海を出口とする一本の流れであり、水の動きという視点からは非常に分かり易いシンプルな川である。この川と私自身の関わりはここ七年ほどに過ぎないが、幼少期から引っ越しばかりで、故郷と呼べるような場所が全く無い、自身の生活を振り返ると、長く接してきた川の一つである。そして、どうやら今後も長く付き合うことになりそうである。今回の川に関する課題をきっかけに、少しでも白川を深く知れたらと思い、水源までたどって、川の全貌を見てみることにした。



さて、大学もクリスマス休暇となった 2007 年 12 月某日、私は夫と共に熊本に帰省した。そう、熊本は彼の故郷なのである。早速、熊本市内を貫く白川を、商店街の入り口に位置する子飼橋から眺める。水はゆっくり流れ、空と同じ灰色をしていた。川幅はおよそ 50 メートルほどである。しっかりと護岸工事が施された岸边に降りてみると、鴨や、サギであろうか水鳥がいて、何かをついばんでいた。見回したところゴミは特に見あたらず、汚いと感じることはなかった。火山灰が常に流れ込むため、透明度は低い。綺麗な川というイメージである、水が澄み、川底が見えるということはないが、汚くはない川がそこには流れていた。

### 2. 白川の今昔

その後、子飼橋近くにある、「白川わくわくランド」へ足を運ぶ。ここは、公営の、白川と水に関する教育普及のための施設である。ここで白川の今昔を学び、係の方に少しお話を聞いた。それによると、熊本では年間三千<sup>ミ</sup>の雨が降り、地下にしみこむかまたは白川に直接流れ、この地域を潤しており、そのしみ込んだ雨水が、阿蘇山の麓からわく地下水となり、これが白川の水源である。水源からの出水がいくつも集まって一本の太い流れ、白川となる。さて、白川をめぐる問題は大きく三点ある。まず、阿蘇山は活火山であるため、小規模でも噴火があると川に火山灰が混ざり、フッ素など毒性物質が発生することがあり、水生生物が激減すること。一度噴火すると、水質

の回復には実に五～十年かかるのだという。次に、熊本市内では白川は天井川となり、台風等で増水すると容易に決壊してしまうこと。天井川とは、川がその流れる土地より高い位置にあることを言い、水害が起こり易い。最後に、これは多くの川も直面しているが、生活排水による水質汚染である。

阿蘇山は現在も活動中のため、一番目の問題の対策は難しい。二番目の治水については、熊本では戦国時代から加藤清正らの指導により治水工事が行われていた。現在は新たにダム計画が進行中である。市内ではしっかりした堤防が目についた。私が今回白川を訪れた時期は降水量も少なく、橋のはるか下を川が流れていたが、一昨年（2006年春）大雨が降ったときはかなり増水し、濁流のように茶色の水が流れていた。実際台風等による水害は多く、大きいものはここ百年で十回に上るといふ。中でも一番被害が甚大だったものは昭和二十八年六月二十六日の大洪水である。市街地の低さから壊滅的な被害を受けた。死者・行方不明者 422 人、床上浸水 11,440 軒、床下浸水 19,740 軒、橋の流失 14 という数字だけを見ても大変だが、今回夫の叔母（69）に当時の話を聞くことが出来た。とにかく、海のようなだったという。橋は、上流から流されてきた物や流された橋が押し寄せたため、次々とドミノのように壊れた。幸い家は高台にあるので被害はなかったが、近隣の家は床上、床下浸水の被害を受け、その処理を手伝いに行ったそうだ。床下から土砂を掻き出すのだが、灰粒子を多く含む泥のため、水を多く含み重くなっていて、出すのが大変だったという。学校の周りも海のようになっていて、ボートで取り残された人を救出している様子が、高台から見えたとのことだ。このような被害を教訓に護岸工事を繰り返した姿を今私は見ている。今穏やかに流れている白川の、そこまで暴れる様子は想像できないが、川を御する技術はこのような教訓から生まれてきたのだと感じた。

三番目の問題である、生活排水による汚染は、60～70年代の高度成長期にひどく汚染されていた頃にくらべれば、きれいになっているらしい。現在は「全観測地点で環境基準を満足している」（国土交通省熊本河川国道事務所）という見解も出ていることを、わくわくランド職員の方に教えていただいた。しかし、同時に、観測地点により汚れは様々であるということ、市街地を流れる川の水質汚染が進んでいると思いきや、下水設備が整っていない山間部の方がし尿による汚染がひどいということも知った。21世紀に入っても清流付近で下水処理が進んでいないことに少なからずショックを受けた。湧水地に近い地域の下水処理設備は一刻も早く進めるべきだろう。

### 3. 水源へ

白川の概要を知った後に、その水源へ出かけた。「山に雨が降り、一所に集まり川となり、やがて海へ注ぐ」というイメージは、川の成り立ちとして、薄ぼんやりと私の頭の中に長年あったものだが、一本の川の流れを実際にたどりきることが出来るシンプルな川は、なかなか無いのではないだろうか。暮れも押し迫った12月某日、JR立田口駅から一路南阿蘇へ向かった。白川を遡る旅である。市内では川幅があったも

のの（写真1）、立野駅で小さなディーゼル列車、南阿蘇鉄道（写真2）に乗り換える頃には、川幅も十メートルほどになっていた（写真3）。余談になるがこの鉄道では運転手の方が運転をしながら名所解説をされていて、車内から何度も、数ある白川の湧水地を教えてくれた（写真4）。白水駅で降り、水源まで歩いた。山間部のため、九州とは思えないほどの寒さである。途中では「白水の水」の、ボトリング工場もあった。水源地周辺は観光名所化しており、冬なので観光客は少なかったものの、山の中の秘境という水源のイメージからはほど遠い。美しい湧水も、立派な観光資源である。しかし土産物屋を通り過ぎて水源にたどり着くと、やはり何とも言えない神秘的な気持ちになった（写真5-7）。水の透明さは他に比べようもない。こぼこぼというくぐもった音と共に、そこで砂が煮え立つように渦を巻き、水が揺れている。周りには魚が群れをなし、水草が揺れる。ときどき空気の泡がととと、と、こらえ切れぬように出てくる。澄み切ったきれいな水がいくらでもわき出てくる（毎分60トンの湧水量がある）のを見て、昔の人はありがたみ以上に、現代人からは想像もつかない神秘性を感じたのではないか。水源の奥には神社があり、水を祀っているそうだ（写真8）。純粋な水がわき出す様はただただ美しかった。口に含むと意外にも冷たくなく、そのせいか口に柔らかく感じた。

この白川の水源地以外にも、阿蘇山の麓にはいくつも水源があり、それが集まり、山を勢いよく下る。川幅は徐々に太くなり、市内に達する頃には穏やかな流れになる。そして有明海に達する。この一本の流れは、熊本の水の豊かさを象徴しているかのようだ。白川の水源地は、阿蘇に降った雨が地中にしみ込み、30~50年を経て地表にわき出したものだ。熊本は地下水が豊富で、熊本市は飲料水を全て地下水でまかない、夏に九州地方が水不足になっても、困ることは少ないという。豊富な地下水、そこから生まれた白川。熊本は阿蘇山を擁するために火の国というが、水の国でもあったのだと実感した。白川は、市内では釣りをしている人を目にするくらいで、川遊びをする人もなく、特別に生活に密着した川という印象は持たなかったが、水の恵みと水の恐ろしさを同時に体現する存在として、人々の意識には常にあるのではなかろうか。わくわくランドでは地域の子供達と水質調査を行っているそうで、その子供達達の作成したレポートなどからは、子供達に白川の意義を伝えていこうという地域の意識を感じた。水遊びで親しめることだけが、身近な川ではない。川と共に歩んだ人々の暮らしを知り、水を媒介とした自然のつながりを理解する上で、白川は貴重な資料となる。そのような人々の知恵や思いと自然の営みを長く伝え続ける川であって欲しいと思う。そういえば熊本の実家では食器洗剤等は石けんを使っていた。汚水を垂れ流して無関心でいることだけはさげたい。あの水源の恵みをできるだけそのまま海まで伝えなければならぬと思う。